

かげ

新美

南吉

月がまうえにのぼったので、木のかげはくろくなり、やねはかがみのようにしろくなりました。

いっぽんの木のえだからひらひらとおちてきたものがありました。それは、いままで木のえだでねむっていたからですでした。からすはつちのうえにあしがついたときおどろいて目をみはりました。からすのしたに、はつきりとまっくろなかげがうつついていたからです。からすはいままでこんなにはつきりしたかげをみたことがありませんでした。まるでそのかげはいきているようでした。

「カウカウ、ころころ。」

とからすはじぶんのかげによびかけました。けれど、かげはなんともこたえません。ただ、「はいはい。」というように口をひらきました。

「おまえはいきているのか。」

とからすがきくと、

「わたしはいきています。」

とこたえるように口をひらきます。

「それではとぶことができるか。」

とからすがきけば、かげは、

「いいえ、はしることはできません。」

とこたえるようです。

「なに、はしることができない。それでは、おれときょうそうしよう。おれはそらをとぶ。おまえはじべたをはしる。いいかい、ほらおかのこちらにちいさなもりがあるだろう。あそこがけっしょうてんだ。」

とからすはいいました。かげもなにかいっているよう

でしたが、からすはそんなことにはとんちやくなしに、とびたつよいをしました。みるとかげもはしりだすよいをしています。

「よいいドン。」

といって、からすはとびたちました。かげもはしりだしました。からすがそらからみおろすと、まっくろなかげは、はたけのうねのうえを、なみのうえの木きのほのようにあがったりさがったりしながらはしっていました。なかなかはやくはしっていました。からすはまけそうになってきたので、いっしょけんめいにとびました。すると、かげもどんはやくはしります。これはいけないとおもってからすはめくらめっぼうはねをうごかしました。ところが、かげのほうでも、むちやくちやにはやくはしるのでした。とうとう、からすはからだじゅうのちからがみんななくなったとき、けっしょうてんのところをひらひらばったりとくろい手ぶくろのようにおちました。するとかげも、からす

といっしょにけっしょうてんについていました。からすはあはあといきをきらしながら、

「いっしょだった。」

というと、かげもくちばしをくるしそうにひらいたまま、

「いっしょだった。」

といったようでした。

つぎのあさ、もりへ木をきりにいった木こりが、もりのそばのくさはらのうえに、からすが一わしんでいるのを見ました。

「かげ」

※『新装版 新美南吉童話集 1 ごん狐』（2012年12月1日、大日本図書株式会社）の「かげ」をもとに一部、漢字表示とルビを編集しました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。(TEL：0569-26-4888)